

## ポーランド側からみたカーニンググレード

|              |   |
|--------------|---|
| 著者           | 田口雅弘 Taguchi, Masahiro  |
| 所属           | 岡山大学大学院社会文化科学研究科／ワルシャワ経済大学世界経済研究所   |
| アイテムタイプ      | 論文  |
| URL          | <a href="http://www.forumpoland.org/taguchi04.pdf">http://www.forumpoland.org/taguchi04.pdf</a> |
| 発行年月日        | 2019年   |
| Copyright by | Taguchi, Masahiro   |
| 初出           | 「ポーランド側から見たカーニンググレード」(<特集>バルト地域にみる欧露関係)、『ロシア・ユーラシアの経済と社会』、2019年7月号、第1042号、pp.2-16.              |

### 1. はじめに

ポーランドは、ロシア（カーニンググレード）と 210km（および海上の国境 12 海里＝約 22km）の国境で接している。カーニンググレードは、モスクワまでは直線距離で約 1300km 離れているが、ワルシャワまでは約 300km（おおよそ東京・名古屋間）、ポーランドの主要な貿易港のあるグダンスクまでは約 200km（おおよそ東京・浜松間）の距離である。圧倒的にポーランドの都市の方が近い。社会主義時代は同じソ連圏に属するソビエト連邦社会主義共和国・カーニンググレード州とポーランド人民共和国として接していたため、政治・経済的な摩擦は、少なくとも表面上は全くなかった。しかし、体制転換後、ポーランドが NATO(1999 年)に加盟し、またバルト三国もそれに続くと(2004 年)、カーニンググレードは NATO 加盟国、すなわちポーランドとリトアニアに囲まれる形となり、政治・軍事的摩擦が増大した。それと同時に、ポーランドから見たカーニンググレードの重要性は大きくなった。とくに、ウクライナ紛争以来、EU・ロシアの摩擦がポーランド・カーニンググレード関係に象徴的に表れた。

ここでは、ポーランドから見たカーニンググレードを、歴史、政治・軍事、経済の側面からまとめた。

### 2. ポーランドとカーニンググレードの歴史的関係

1226年、ポーランド北東部マゾフシェ地方のコンラッド1世（マゾフシェ公）は、プルーセン人（異教徒のバルト・プロイセン人）を平定するため、当時ハンガリーにいたドイツ騎士団を招き入れた。ハンガリー王は、クマン人の来襲を防ぐためドイツ騎士団を招き入れていたが、ドイツ騎士団が独立した領邦国家を形成し国王の権威に衝突したため、彼らを国外追放したところだった。コンラッド1世は、プルーセン人の住むプロイセンを平定する代償として、ドイツ騎士団にこの地を分有する権利を認めた。結果的に、この地に根付いたドイツ騎士団は次第に勢力を強め、ポーランドとリトアニアに敵対する強力な国家となった。ドイツ騎士団は、プロイセンを東方植民として統治し、プロイセンのキリスト教への改宗、都市の形成と近代化、ユダヤ人、ドイ

ツ人商人を招き入れた商業的發展、などに力を入れた。そして、ポーランド史においては、コンラッド1世は、ドイツ騎士団の定住と勢力拡大を許してしまった人物として、ネガティブな評価が与えられることになる。

1224年、ドイツ騎士団はマリーエンブルク（現在のマルボルク）本拠地を置き、ドイツ騎士団の国家を築いた。この国家のもとで、ケーニヒスベルク（現在のカーニングラード）、ダンツィヒ（現在のポーランドのグダンスク）、エルビング（現在のポーランドのエルブロング）、コペルニクスが学んだ現在ポーランドのトルンなどが発展した。しかし、税制や裁判制度などにダンツィヒやエルビングが反発し、市民とドイツ騎士団の対立が長く続いた。しかしながら、ドイツ系一般市民やドイツ商人は、寛容なポーランド王国を支持していた。

1385年、利害を共にするポーランド王国とキリスト教に改宗したリトアニア大侯国は、同君連合を結成し、ドイツ騎士団と対立した。バルト地域のキリスト教化を目指していたドイツ騎士団にとって、リトアニアの改宗は騎士団国の存立自体を脅かす危機となった。1410年のグルンヴァルド（タンネンベルク）の戦いで、ドイツ騎士団はポーランド・リトアニア連合軍に決定的な敗北を喫した。1411年、第一次トルンの和約が交わされ、ケーニヒスベルクをはじめとしたドイツ騎士団領はポーランド王国の従属国となった。また、騎士団領内の商業都市は、ポーランド王国の直接の庇護下におかれ、騎士団から独立して自治権を獲得した。1466年の第二次トルンの和約で、ドイツ騎士団は首都のマリーエンブルクやハンザ同盟の港町ダンツィヒを含む東ポモージェをポーランドに割譲した。残された領地は、東プロイセンのみとなり、首都はマリーエンブルクからケーニヒスベルクに移された。その後、ドイツ騎士団は勢力を回復することなく、最終的に世俗化し、1525年、アルブレヒト騎士団総長はポーランド王ジグムント一世に改めて臣従の誓いをしてポーランド王の臣下となった。こうして、騎士団領はポーランド王国の封臣である世俗化されプロイセン公国となった。しかしながら、ケーニヒスベルクがポーランドに同化されることはなかった。

グルンヴァルドの戦いは、ポーランドの歴史のみならずヨーロッパ中世史において、極めて重要な戦いと位置付けられている。ポーランド人にとっては、歴史上数少ないドイツに対する勝利であり、ポーランド史の中でも大きな出来事として取り上げられる。ポーランドの著名な画家マテイコの油絵「グルンヴァルドの戦い」、「プロシアの臣従」は代表作であり、ポーランド国民に親しまれている。社会主義期には、グルンヴァルド十字勲章が作られ、グルンヴァルドは50ズウォティ札の裏面のデザインにも使われた。また、グルンヴァルドの古戦場跡では、毎年夏に戦いを再現する祭りが開かれ、ポーランド内外から毎回10万人を超える観客を集めている。

第一次世界大戦後、ポーランドが独立した際、ダンツィヒを除く西プロイセンは、ポーランド領となった。一方、東プロイセンはドイツ領として残された。しかし、ドイツでナチ党が台頭してくると、ヒトラーはポーランドにいわゆる「ポーランド回廊」の「返還」を要求してきた。これを拒んだポーランドにドイツ軍が侵攻して第二次世界大戦が始まり、東プロイセンは再びドイツと結ばれた。1944年にはソ連赤軍が東プロイセンに進撃を始め、1945年のケーニヒスベルクの戦いでドイツ軍は敗北し、ポツダム会談で東プロイセンの南部はポーランド領に、ケーニヒスベルクを含む北部はソ連に編入された。

第二次世界大戦後、ソ連圏に包括されたポーランドは、公式にはソ連、カーリーニングラード州と友好関係にあった。1905年にノーベル文学賞を受賞したポーランドの文学者ヘンリク・シェンキェヴィチは、『北方十字軍の騎士たち (Krzyżacy)』でグルンバルドの戦いを描いているが、これは1960年にアレクサンデル・フォルドによって映画化された。この映画は、ナチスドイツとの戦争に勝利した後の社会主義政権下という時代背景もあり、反ドイツのプロパガンダに政治利用された。

このように、ポーランドの歴史から見ると、カーリーニングラード（ケーニヒスベルク）は、ポーランドとドイツの勢力争いが激しく繰り返された地であった。しかしながら、ヴィルニユス（リトアニア）やリボフ（ウクライナ）のように、ポーランド系住民が定着しポーランド文化が花開いた土地ではなかったといえる。したがって、ポーランド人のカーリーニングラードに対するノスタルジーはほとんどなく、ドイツ人のように郷愁に駆られてこの地を訪ねるといってもあまりないといえる。

### 3. ポーランドとカーリーニングラードの政治的関係

1999年、ポーランドはチェコ、ハンガリーとともに北大西洋条約機構（NATO）加盟した。これは、NATOがロシア（カーリーニングラード）と国境を接することになったことを意味する。実際に国境を接するポーランドにとっては、将来にわたって安全保障の枠組みを決定する大きな決断であった。

1990年代初頭の旧ソ連・東欧体制転換後、カーリーニングラードがどのような性格を持つかは、ポーランドが重大な関心を寄せるテーマであった。カーリーニングラードが独立した中立地域（バルトロシア共和国／自由経済圏「ヤンタル」）となれば、EUとロシアの間のバッファー的な地域となりうる。しかし、カーリーニングラードが独立すれば新生ドイツの経済的影響力が強まる可能性があり、ポーランドが強大なドイツと親ドイツ地域に挟まれる形になる。他方、ロシア領にとどまれば、ロシアの対EU軍事政策の最前線となる。カーリーニングラードがどのような政治・軍事的性格を持つのか、またポーランドがそれに対してどのような政治・軍事的立場でカーリーニングラードと国境を接するのかは、ポーランドの将来にとって大きな意味を持つ懸案事項であった。

1989年のポーランド体制転換直後、極めて短い期間ではあるが、ポーランドが「中立国」を目指す議論があった。もともとポーランドには、中部ヨーロッパに非核地帯を設ける構想があった。1957年に当時のポーランド外相であったA・ラパツキが提唱した「ラパツキ構想」である。ポーランド、両ドイツ、チェコスロバキアにおいて、核兵器の製造、貯蔵、搬入、配備を禁止し、一方核保有国はこの地域に対する核攻撃をしないとするものだった（1958年の第2次ラパツキ案）。この案は、結果としてソ連に有利な緩衝帯を拡大するものであり、ソ連は賛成したが米国は反対した。こうした考えは、中欧では時々提起され、議論になった。例えば、フィンランド、スウェーデンが独自の非核地帯構想を提起したり、NATO加盟国のノルウェー、アイスランドが非核国宣言を行っている。1990年代にはベラルーシやウクライナもこうした趣旨の提言を国際社会に向けて行った。NATO自身は、2010年に「核兵器なき世界」という目標を戦略概念で掲げている。もっとも、こうした

議論の流れはあるものの、実際に中欧に非核地帯を置くとなると、米国、ロシアも加盟した欧州安全保障協力機構(OSCE、旧全欧安全保障協力会議:CSCE)での全欧州的安全保障システム再構築、ないしは東西両ブロックのイデオロギー対立に基づく軍事同盟の同時消滅といった議論が必要になる。こうした議論は、東西の間にあった諸国には切実な問題ではあったが、結果的には構想の「表明」から大きく進展するものではなかった。

1991年にワルシャワ条約機構が解体議定書の調印によって消滅し、また、NATO加盟国も中東欧諸国のNATO加盟に前向きな姿勢を見せてくると、ポーランドのNATO加盟の方向は次第に明確になってきた。こうした動きを受けて、1994年にNATOと他のNATO非加盟欧州諸国、ならびに旧ソ連構成国間の信頼醸成を目的とした「平和のためのパートナーシップ(PfP)」が設立された。「平和のためのパートナーシップ」は、結果的にポーランドなどの諸国のNATO加盟の準備を促進する役割を果たした。

最終的に、1997年、ポーランド、チェコ、ハンガリーの新規加盟が決定された(正式加盟は1999年)。こうして、NATOとロシアはポーランド・カーリーニングラード国境でお互いに接することになる。2004年にはエストニア、ラトビア、リトアニアもNATOに加盟し、カーリーニングラードはNATO加盟諸国に囲まれる形となった。

この現状を踏まえて、ポーランドの安全保障政策の基本目標は次の方向でおおよそ固まった(Sakson [2015], p.46) :

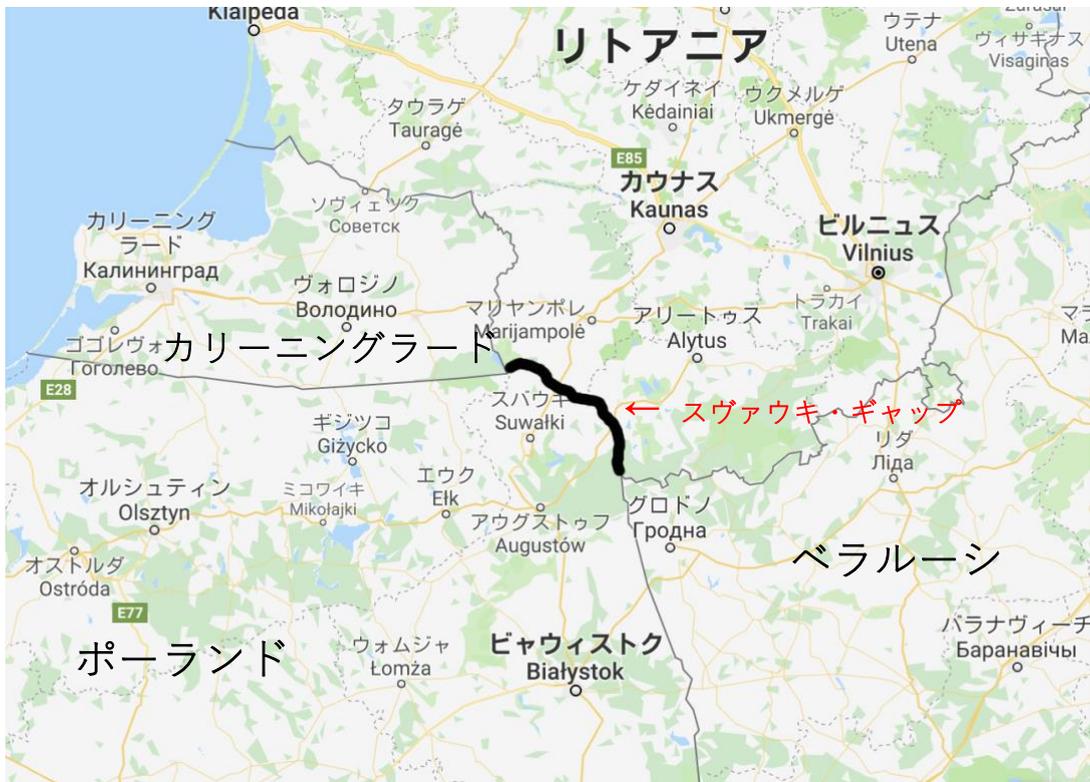
- ・ ポツダム宣言の正統性を重視し、ヨーロッパの国境のいかなる変更も容認しない。この懸念の背景には、旧西ドイツの政策が明確に予測できなかったということがある。一番の懸念は、カーリーニングラード州をロシア在住ドイツ系住民の自治共和国に変えること、あるいはドイツの強い影響下にある、いわゆる4番目のバルト共和国にする可能性である。
- ・ (旧ソ連諸国の国家構造の崩壊または地域的な武力紛争の結果として)中東欧地域とバルト海地域が崩壊することを防ぐ。
- ・ 新しく創設されたバルト諸国との良好な関係を維持する。
- ・ 「東プロイセンの再建」を防ぎ、バルト海地域におけるドイツの影響力の増大に対抗する。

ここで、ポーランドの懸念はロシアだけではなくドイツにも向けられていることは興味深い。

2000年代に入ると、ポーランドとロシアの関係は次第に悪化する。市民プラットフォーム(PO)はロシアとの関係に慎重であったが、法と正義(PiS)は明確な反ロの姿勢をとった。一方ロシアは、NATOへの不信感から、カーリーニングラードの再軍備化を強化した。ロシアにとっては、カーリーニングラードは軍事的に重要な不凍港を持つ戦略拠点で、バルチック艦隊の本拠地であった。これらの部隊は90分以内にポーランドのグダンスク、グディニャ、ソポトを占領することができ、12時間以内にワルシャワ郊外に到達、24時間以内にポーランド西部のヴロツワフ、ポズナンへの攻撃を開始できた。1990年代初頭の体制転換後、10~15万人配備されていたカーリーニングラード兵力は、2000年代初頭には6~7万人にまで削減されたが、2008年頃から再強化され、現在約22万人に増強されている。

とりわけ近年は、陸軍の強化とミサイル配備がポーランドにとって大きな脅威になっている。ポーランドとリトアニアの国境は約100kmで、カーニングラードとベラルーシの間に広がっている。NATO加盟国であるバルト3国（リトアニア、ラトビア、エストニア）と他のNATO加盟国を結ぶ細い地域で、ポーランドのこの国境にある都市名からスヴァウキ・ギャップ（Suwalki Gap）と呼ばれている。NATOのウィークポイントである。近年、ロシア軍はスヴァウキ・ギャップに近い地域での陸軍の増強をおこなっている。また2013年および2017年の2回にわたり、ロシア軍は、スヴァウキ・ギャップに侵攻してバルト3国を他の西ヨーロッパ各国から切り離すというシナリオで軍事演習を行なっている。

図1 スヴァウキ・ギャップ



出所： Google Map に筆者書き込み。

さらに2016年、カーニングラードにはイスカンデル・ミサイルが配備された。このミサイルは最大射程距離が約500キロで、核弾頭が搭載可能である。ポ独国境までが射程に入り、ワルシャワまで5分、ポ独国境まで7分で到達する。2018年に配備された改良型は最大射程距離約700キロで、ベルリンも射程圏に入る。これに対し、同年にはポーランドのドゥダ大統領がホワイトハウスでトランプ米大統領と会談し、ロシアの脅威をにらんで両国が軍事協力を強化することで合意した。現在、イージス弾道ミサイル防衛システム（いわゆる地上イージス）を、グダンスクの西約100kmにあるスプスク近郊のレジコヴォ（Redzikowo）に建設中で、2020

年の完成を目指している。

カーニンググラーードの動向は、ポーランド、バルト諸国、EU、そしてNATOに対するロシアの政策の変化と方向のマーカールとなっているが、近年のこうした動きは両陣営の緊張を高め楽観を許さないものになっている。

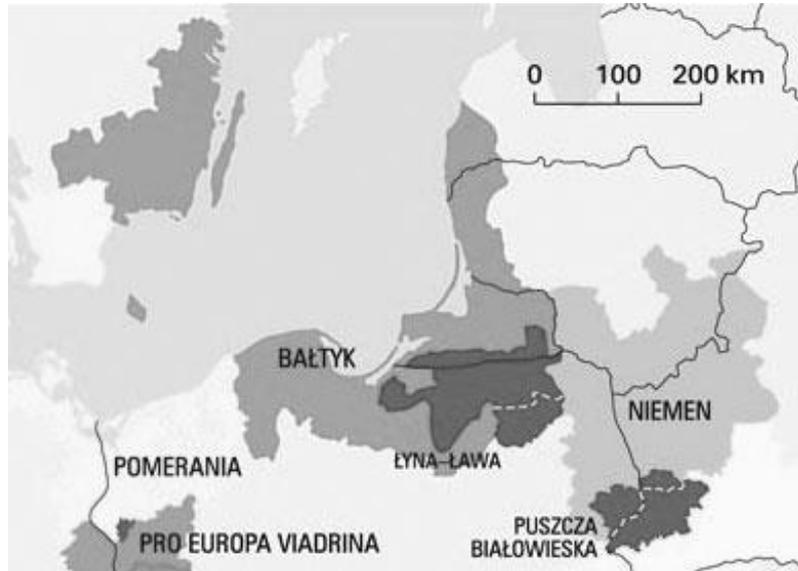
#### 4. ポーランドとカーニンググラーードの経済関係

カーニンググラーードは、ロシアとポーランドおよびEUの新しい協力関係構築のためのパイロット地域でもある。EU側にも、「EU周辺の問題はEU内部の問題である」という認識がある。もし、カーニンググラーードの経済、社会状況が不安定になれば、それはEUの安定にとっても脅威になる。1990年代の体制転換以降、EUはEU周辺諸国とのクロスボーダリージョンの形成に尽力してきた。また、EUボーダー地域では、ノーザン・ディメンション、イースタン・ディメンション、バルカン・ディメンション、環バルト海協力、地中海パートナーシップなど、独自の協力関係が模索された。これらの協力体制は、環境保護や社会的問題への対応、地域文化交流などを柱とし、地域利害を確保しようとする意図もあった。こうした試みは、最終的には2004年のEU近隣諸国政策(ENP)に収斂していく。

具体的に、ポーランドとカーニンググラーードの経済諸関係構築を見てみよう（田口雅弘 [2011]、pp.32-38）。ポーランド・ロシア善隣友好条約が1992年に締結されて以降、ポーランドとカーニンググラーードとのクロスボーダー協力は徐々に進行している。また、1996年に連邦法「カーニンググラーード州における経済特区について」（改正法：2006年）が制定されると、ポーランド、ドイツ、リトアニアなどからの直接投資が増加した。貿易では、カーニンググラーードからポーランドへの輸出は、石油、ガス、石油製品、製材・合板、化学肥料が中心である。また、カーニンググラーードのポーランドからの輸入は、農産物・食品、化学製品、機械・設備が中心である。一時はポーランドの対カーニンググラーード投資が対モスクワ投資の約2倍に達した。しかし、ポーランドがEUに加盟した翌年（2005年）あたりから新規投資は徐々に減少し、リーマンショック以降は大幅に減少した。カーニンググラーードの消費が伸び悩んだこともポーランド企業撤退の一因ではあるが、故カチンスキ大統領がロシアと政治的に対立したことも、ポーランド・カーニンググラーードへの投資に大きな影を落とした。最盛期には600社近くのポーランド企業がカーニンググラーードに進出していたが、2010年時点では約80社に激減した。

ポーランドのユーロリージョンをベースとした北東国境地域との経済協力では、ユーロリージョン・バルト（Euroregion Bałtyk）、ユーロリージョン・ニエメン（Euroregion Niemen）、ユーロリージョン・ウィナ=ワヴァ（Euroregion Łyna-Ława）がある（図2参照）。

図2 ポーランド国境地帯を含むユーロリージョン



(注) 濃い部分は重複する地域。

(出所) 中央統計局(Główny Urząd Statystyczny: GUS)ホームページ  
(<http://www.stat.gov.pl/urzedy/wroc/euroreg>)。

ユーロリージョン・バルトは、1998年に調印され、ポーランド、デンマーク、リトアニア、ロシア（カーニングラード）、スウェーデンの諸地域を含むヨーロッパ最大級のユーロリージョンである。ユーロリージョン・バルトでは、自治体の交流、金融・産業・サービスでの協力、教育・学術・文化・スポーツ・観光での協力、環境対策などの幅広い領域で協力活動を行っている。ユーロリージョン・バルトの枠組みの下でのポーランド・カーニングラード関係では、住民などの小規模な国境通過の手続き簡素化、両国間の物流・交通インフラ整備、国境地区の農地における共同の灌漑事業などが課題である。しかしながら、物流・交通インフラ整備等で目立った進展はなく、住民などの小規模な国境通過も一時的に進展はあったが、その後のポ露間関係悪化で棚上げになっている。

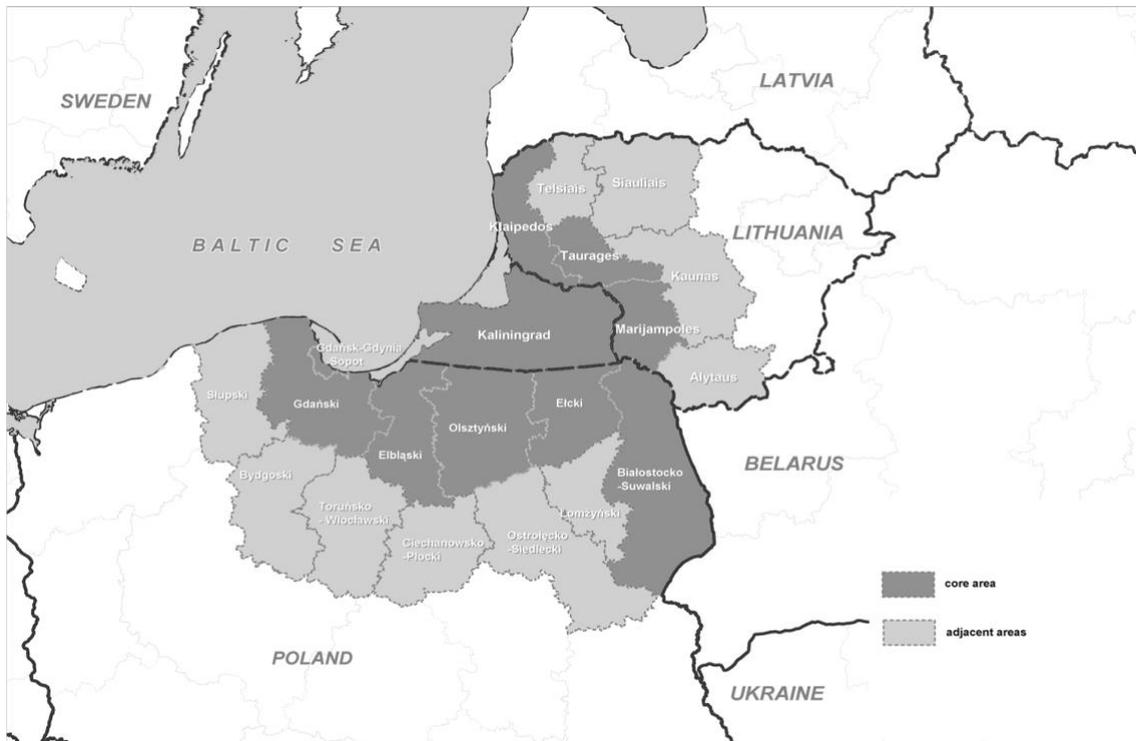
ユーロリージョン・ニエメンは、ポーランド、リトアニア、ベラルーシの3カ国によって1997年に調印された。2002年にはロシア（カーニングラード）が参加し、現在4カ国となっている。ユーロリージョン・ニエメンは、ロシア、ベラルーシの国内事情がEUとは異なるため、政府間で調印を行っている。その結果、自治体のイニシアティブが弱いという欠点がある。トランスリージョン協力の要点は、他の地域協力と同じであるが、将来非関税地域を創立することを目標にしていることは大きな特徴である。もっとも、各国間の政治関係が必ずしも良好ではなく、道のりは険しい。

ユーロリージョン・ウィナ=ワヴァは、2003年に、ユーロリージョン・ウィナ=ワヴァ国境近隣自治体連合体として正式に登録され、バルトシツェに所在地がおかれた。このユーロリージョンには、ヴァルミア・マズ

ーリ県の9の郡、カーリーニングラードの4つの郡 (Bagrationowsk、Gusiew、Oziersk、Prawdinsk) とマモノーヴォ市 (Mamonowo) が参加している。このユーロリージョンでは、輸送、交通、通信、治安、エコロジー、文化、失業対策の面で、協力を進めている。特に、国境の観光コース道路の整備、バグラティオノフスクとバルトシチェを結ぶ鉄道整備など、交通インフラの整備が課題である。また、地域振興策として、環境保護を進めた上で、民宿、ホテル、キャンプ場を整備し、観光の振興を目指している。しかしながら、ユーロリージョン・バルト、ユーロリージョン・ニエメン (2002年、ユーロリージョン・ニエメンにロシア・カーリーニングラードが参加) と地域も課題も重複するところが多く、あまり目立った活動は展開されていない。

そのほか、「欧州近隣・パートナーシップ・クロスボーダー協力 (ENPI CBC) リトアニア=ポーランド=ロシア・プログラム」(2007-2013年) などの試みもあった (図3参照)。これは、EUの欧州近隣諸国政策戦略の一環で、EU周辺諸国の経済的・社会的発展を促進してEUの域内外の格差を是正する、環境・公衆衛生・組織的犯罪の防止を図る、安全で効率的な国境管理を実現する、越境地域の人材交流を図る、などを通じEUボーダーの安定性を高めることを目的としていた。これは、2014年から欧州近隣諸国プログラム (ENI) に引き継がれていく。

図3 ENPI CBCリトアニア-ポーランド-ロシア・プログラム



(注) 中央の灰色の部分の中核地域、周辺の薄い色の部分が協力地域。濃い破線は国境、薄い実線は郡の境界線。

(出所) European Commission [2008], p.4.

このように、ポーランド東部とカーニングラードをはじめとしたとした東部国境地域のクロスボーダー・リージョンは、あまり機能していないのが現状である。今後のカーニングラード経済発展にとって、隣国との経済協力は重要であるが、ポーランド東部クロスボーダー・リージョンと複数の協力の枠組みがあるにも関わらず、十分にその効果をあげていない。その理由は、比較的貧しい地域同士の協力が中心であり、相互活性化を図るための要素に乏しい、政治・社会的に未だ大きな壁がある、EUボーダーを挟んだ諸国間に大きなシステムの違いがあり国家間で調印したものの地域のイニシアティブが十分に引き出せていない、などである。社会・経済インフラへの投資が遅れている。たとえば、ワルシャワからカーニングラードまでは地図上で直線距離約300kmであるが、時刻表によると最短でも約7時間（乗り換え待ち時間、国境検査含まない）かかる。日本の東京駅一名古屋駅間が約300kmあり、新幹線（のぞみ）で1時間40分で行けることを考えると、交通インフラ整備の遅れは、深刻であるといえる。

カーニングラードの今後の発展にとって、EUの東のボーダーであるポーランドとのクロスボーダー・リージョン協力は重要であるが、課題は多く、一時期協力関係の進展は見られたものの、依然厳しい状況が続いている。

図4 ポーランド・カーニングラード国境周辺のグミナ（地方自治体基礎組織）



出所： Unia Europejska [2016], p.7.

ところで、2012年7月には、「ポ露国境小規模通行協定」が発効した。これは、カーニンググロードとポーランドの国境周辺市町村との30日間の通行許可証を、半年間に連続90日を限度として発行するというもので、280万人がその対象となった。地域的にはカーニンググロード全体と、国境から約50km程度のポーランド市町村が含まれた（図4参照）。ポーランドは2007年からシェンゲン協定に入っているため、この協定には欧州委員会の同意が必要だったが、2011年12月には欧州委員会はこうした協定の締結を承認した。しかしながら、ロシア人の流入が密輸の増大や治安悪化に繋がると考えたリトアニアこれに強く反対し、ポーランドとの軋轢を生んだ。

2013年には、実際に延べ数十万人がこの制度を利用した。また2014年には、「2014-2020年ポ露トランスボーダー協力プログラム」が締結された。これは、EU、ロシアが共同で出資し、文化振興、歴史遺産の保存、環境保護、気候変動への適応、地域のアクセシビリティの向上、輸送および通信ネットワーク整備、国境管理と国境警備の支援、などを促進する内容であった。とりわけ、カーニンググロードからポーランドに入国し、様々な物資を購入するケースが増大し、ポーランド国境周辺地域に大きな経済効果をもたらした。しかしながら、ウクライナ紛争の泥沼化を受けてEU・ロシア関係が悪化すると、2016年7月、ワルシャワで開催されたNATO首脳会議をきっかけにポ露国境小規模通行を一時停止し、その後事実上小規模通行が廃止された。結局、4年間でこの試みは幕を閉じたことになる。なお、小規模通行が始まった時は、これを推進する市民プラットフォーム(PO)が政権をとっていたが、閉鎖した時は、ロシアとの小規模通行に懐疑的な法と正義 (PiS) が政権の座についていた。

ポーランドにとって、東部地域をいかに活性化するかは長年の課題である。カーニンググロードと接するヴァルミア・マズールィ県は、県民一人当たりの域内総生産(GRP)はワルシャワを擁するマゾフシェ県の半分以下で、失業率はマゾフシェ県が4.9%であるのに対し、ヴァルミア・マズールィ県は全体で10.4%、ヴィスワ潟湖(Zalew Wiślany)に面する歴史・観光都市エルブロンク(Elbląg)では16.4%に達している(2019年2月現在)。

先にも述べたように、小規模国境通行は無期限で棚上げされ、国境地域の経済活動が停滞している。そうした中、地域の経済活性化の起爆剤として期待されているのが、ヴィスワ砂州横断運河である。この構想は、2006年に法と正義(PiS)のヤロスワフ・カチンスキ首相が提唱し、2012年に完成する予定であったが、2007年の総選挙で市民プラットフォーム(PO)が勝利すると、ドナルド・トゥスク首相はこの計画を凍結・延期した。2015年の総選挙で法と正義(PiS)が再び政権をとると、ベアタ・シドゥウォ首相は2016年に閣議決定でこの計画を復活させた<sup>1</sup>。

ヴィスワ潟湖 (Zalew Wiślany) は、ロシアではカーニンググロード潟湖 (Калининградский залив) と呼ばれている。潟湖は90.7kmの長さで、うち35.1kmはポーランドの領域である。平均水深は2.7mと浅い。ポーランド最大の河川ヴィスワ川の一部もヴィスワ潟湖に流れ込んでいる。バルト海との境にはヴィスワ砂州 (Mierzeja

<sup>1</sup> Uchwała Rady Ministrów z 24 maja 2016 r. w sprawie ustanowienia programu wieloletniego o nazwie "Budowa drogi wodnej łączącej Zalew Wiślany z Zatoką Gdańską w latach 2016-2022".

Wiślana) があり、幅は1~2kmである。1479年の暴風雨でヴィスワ砂州の北側が水没し、1510年の暴風雨で完全に途切れ、バルト海とつながった。この部分はロシア (カーニングラード州) 領でバルト海峡 (Балтийский пролив) と呼ばれ、全長2km、幅450~750m、水深12mの水路になっている。ポーランドではピワヴァ海峡 (Cieśnina Piławska) と呼ばれている。

現在、とりわけカーニングラード側からポーランド側にかけてのヴィスワ潟湖の水深が浅く、大型船舶が航行できない。しかし、ロシアがポーランドのために湖底を掘って便宜を図ることは当然期待でない。また、2009年にボ露間で航行に関する協定が結ばれたものの、ピワヴァ海峡を通過してポーランド側に航行することはロシア側からかなり制限されている。

ヴィスワ砂州横断運河建設計画では、35,000DWT級貨物船 (最大載貨重量35,000t)、許容喫水12m、最大全長200mの船舶が航行できるようになる。完成すると大型船舶の航行が可能になり、エルブロンクの港湾・コンテナターミナル整備による物流活性化、グダンスク、グディニャ、ソポットの港湾の混雑緩和、エルブロンクの観光業振興、NATOの軍事面での東方防衛強化が図れると期待されている (図5、図6参照)。

バルト海からポーランド領域内でのヴィスワ潟湖へのアクセスを実現するプランは、第二次世界大戦後の早い時期から存在していた。1945年には、戦前に商工省大臣、副首相兼財務大臣を歴任しグディニャ港の建設を主導したエウゲニウシュ・クファトコフスキがヴィスワ砂州横断運河建設を計画したが、実現には至らなかった。現在でも、この計画には、バルト海からヴィスワ潟湖への唯一の海峡を有しその航行の既得権を持つロシア側からの強い反発がある。また、ヴィスワ潟湖の生態系を破壊し、自然環境が悪化するという内外の反発も強い。しかしながら、ポーランド政府は、2022年頃の完成を目指して、着々と準備を進めている。ヴィスワ砂州横断運河が完成し、エルブロンク港が整備されたとして、それが経済的にどのくらい波及効果を持つかという問題もあるが、少なくとも、ポーランドとロシア (カーニングラード) をまたぐ潟湖へのバルト海からの進入のコントロール権は、ロシアの独占が崩れることになる。特に、NATOの艦隊がここを利用できるようになれば、ロシアとしては心穏やかでないだろう。

図5 ヴィスワ潟湖におけるエルブロンクまでの従来の航路とヴィスワ砂州横断運河完成後の航路



解説： 従来の航路では、ロシア（カーニングラード）の領海および内水の通過航行許可を取得してエルブロンクまで航行しなければならなかったが、ヴィスワ砂州横断運河が完成すると、ロシア領海および内水の通過航行許可は必要なくなる。

出所： Google Mapに筆者書き込み。

図6 ヴィスワ砂州横断運河と周辺交通システムの完成予想図



解説： 完成予想図の奥がバルト海、手前がヴィスワ潟湖。2つの旋回橋で交通が制御、水門で水位が調整される。

出所： Karta Informacyjna Przedsięwzięcia Droga wodna łącząca Zalew Wiślany z Zatoką Gdańską - lokalizacja Nowy Świat, Biuro Projektowo-Doradcze EKO-KONSULT Andrzej Tyszecki, Gdańsk, Czerwiec 2017 r., p.8, 'Wizualizacja kanału żeglugowego wraz z układem drogowym'.

## 5. まとめにかえて

以上見てきたように、ポーランドとカーニングラードは、体制転換直後に期待されたような経済交流の活性化が図れていない。むしろ、ヴィスワ砂州横断運河建設に見られるように、ポーランドが相互交流に基づかない投資計画を推進しているのが現状である。政治的には、ウクライナ問題で先鋭化したEU・ロシア関係が、ポーランドとカーニングラードの交流に大きな影を落としている。また、ロシアとの経済交流に前向きな市民プラットフォーム(PO)と、懐疑的な法と正義 (PiS) のどちらが政権をとっているかも、ポーランドとカーニングラードの関係に大きな影響を与えているといえる。

(参考文献)

European Commission [2008] 'Lithuania-Poland-Russia ENPI Programme 2007-2013'.

Główny Urząd Statystyczny 「地域データバンク Bank Danych Lokalnych」 <https://stat.gov.pl> Access: 2019.05.04.

Sakson, Andrzej [2015] 'Obwód Kaliningradzki w otoczeniu NATO i Unii Europejskiej'. *Rocznik Bezpieczeństwa Międzynarodowego*, vol. 9, nr 1.

Unia Europejska [2016] Program współpracy transgranicznej Polska-Rosja 2014-2020, Projekt 29.04. 2016,

田口雅弘[2011]「カーニングラードとポーランド東部クロスボーダー・リージョン」、『ロシア・ユーラシアの経済と社会』、2011年8月号、第948号、pp.32-38.

たぐち・まさひろ 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授

参考： EU・ロシア関係変動のマーカースとしてのカーニングラードと緊迫する国境地帯  
Presentation: Masahiro Taguchi  
July 27, 2019 15:00 - 16:30 VISTULA University



1

概要

- カーニングラードの歴史をポーランドの視点から整理する。
- EUとロシアの国境としてのカーニングラードの、軍事的、政治的影響を整理する。
- カーニングラードとポーランドの経済的関係を整理する。

2



3

歴史

1226年、コンラッド1世（マゾフシェ公）、プルーセン人（異教徒のバルト・プロイセン人）を平定するため、当時ハンガリーにいたドイツ騎士団を招き入れる。プロイセン平定の代償として、ドイツ騎士団にこの地を分与する権利を認められた。ドイツ騎士団は勢力を強め、ポーランドとリトアニアに敵対する強力な国家に。ドイツ騎士団は、プロイセンを東方植民として統治、キリスト教への改宗、都市の形成と近代化、ユダヤ人、ドイツ人個人を招き入れた商業的繁栄、などに反力。

1294年、ドイツ騎士団はマリエンブルク（現在のマルボルク）本拠地を置き、ドイツ騎士団の国家を構築。この国家のもとで、ケーニヒスベルク（現在のカーニングラード）、ダンツィヒ（現在のポーランドのグダニスク）、エルブレンク（現在のポーランドのエルブロンク）、コベリニウスが学んだ現在ポーランドのトロンスタッドが発祥。

4



5

6

669年、東ローマ帝国にダンツィヒとエルブレンクが没落し、市長とドイツ騎士団の対立が深刻化。しかしながら、ドイツ系一般市民やドイツ貴族は、寛容なポーランド王臣を支持。

1385年、利権を共にするポーランド王国とキリスト教に改宗したリトアニア大侯国は、同盟連合を結成し、ドイツ騎士団と対立した。

1410年のゲルダウエルド（タンネンベルク）の戦いで、ドイツ騎士団はポーランド・リトアニア連合軍に決定的な敗北。

1411年、第一次トルンの和約。ケーニヒスベルクをはじめとしたドイツ騎士団領はポーランド王臣の支配下に落ち、騎士団領内の常設官衙は、ポーランド王臣の直接の統制下ににおかれ、騎士団から独立して自治権を獲得した。

1466年、第二次トルンの和約。ドイツ騎士団は首都のマリエンブルクをハンザ同盟の港町ダンツィヒを含む東モラヴィアをポーランドに割譲した。首都はマリエンブルクからケーニヒスベルクに。

6



7

8

第一次世界大戦後、ポーランドが独立した際、ダンツィヒを除く西プロイセンは、ポーランド領。一方、東プロイセンはドイツ領として残された。

ドイツでナチ党が台頭してくると、ヒトラーはポーランドにいわゆる「ポーランド回廊」の「返還」を要求。これを拒んだポーランドにドイツ軍が侵襲して第二次世界大戦が勃発。東プロイセンは再びドイツ領となった。

1944年にはソ連軍が東プロイセンに進軍を始め、1945年のケーニヒスベルクの戦いでドイツ軍は敗北し、ボツダム会議で東プロイセンの南半分はポーランド領に、ケーニヒスベルクを含む北半分はソ連に編入された。

8

9

1999年、ポーランドNATO加盟。

1991年、ワルシャワ条約機構消滅。

1994年、「平和のためのパートナーシップ(PfP)」設立。

1997年、ポーランド、チェコ、ハンガリーのNATO新規加盟決定（正式加盟は1999年）。

2004年、はエストニア、ラトビア、リトアニアがNATOに加盟。カーニングラードはNATO加盟国に囲まれる形となった。

9

**ポーランドの外交政策**

- ・ボツダム宣言の継続性を重視し、ヨーロッパの回復の中心となる重要な役割を担う。この理念の背景には、前西ドイツの政策が明確に不承でなかった。一方の理念は、カーニンググランド州をロシア自治ドイツ東部の自治州に併合すること、あるいはドイツの影響下にある、いわゆる4番目のドイツ共和国とする可能性。
- ・（独ソ連協定の国家構想の崩壊または地域的な武力紛争の結果として）中東欧地域とバルト海地域が崩壊することを防ぎ、
- ・新しく創設されたバルト諸国との良好な関係を維持する。
- ・「東プロイセンの再建」を妨ぎ、バルト海地域におけるドイツの影響力の増大に反対する。

1

**NATOとロシアの軍事的緊張**

- ・カーニンググランドの部隊は90分以内にポーランドのグダンスク、グダニク、ソポトを占領することになり、10個師団がポーランドに侵襲する可能性がある。
- ・1990年代初期の体制転換後、10~15万人配備されていたカーニンググランドNATO加盟軍は、2000年秋勃列日6~7万人にまで削減されたが、2008年頃から再増強され、現在の22万人に増強
- ・スロヴァキア、ハンガリー、エストニア、リトアニア、ラトヴィア、エストニア）と他のNATO加盟国を結ぶ圏い地域で、NATOの弱点の一つ。
- ・2013年および2017年の2回にわたり、自衛隊がカーニンググランドに派遣し、自衛隊を他の自衛隊と連携して演習するというシナリオで軍事演習

2



3

**イスカンドール** ロシア製戦略短距離弾道ミサイル (SRBM) システム

特徴:

- ・ 敵の活動状況監視の中で最も確率で任務を遂行
- ・ ミサイル飛行経路の計算と入力、発射装置が自動で実行
- ・ システム搭載車両は移動可能
- ・ クラスター弾頭、燃料酸化爆弾、威力増大弾頭、バンカーバスター一掃の中距離弾頭、対リーダー作戦用の電磁パルス弾頭などの通常弾頭が搭載可能
- ・ 弾道ミサイルより低い軌道を取り、飛行最終段階には回避行動を行い、ミサイル防御システムをいくいくるため命中率高
- ・ 改善型は航続距離1000km、ベルリンまで射程。ワルシャワまで5分、ベルリンまで8分程度で到達

4



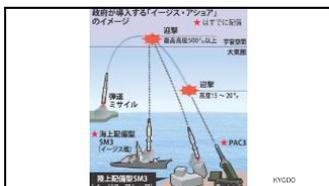
5



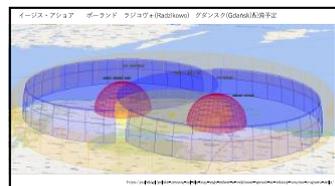
6



7



8



9

**F15 (第4世代ジェット戦闘機)**  
 特徴：1970年代から採用、現在でもトップクラスの性能。実戦で撃ち落とされたことがない。  
**F22ラプター (第5世代ジェット戦闘機)**  
 特徴：3S①スーパークルーズ(超音速)、②ステルス、③DTC(敵艦探知機)  
 輸出していない。スペックが高すぎ。高価(150億円以上)  
**F35 (R) (第5世代ジェット戦闘機)**  
 特徴：コンピュータによる情報統合、イージス艦とリンク、ヘルメットディスプレイで360°の視野、遠方を攻撃できる。空母母艦直降、その他に日本ではいずる(空軍艦一歩目)に搭載可能。機体にも搭載可能。日本は開発に関わっていないがソースコードは入手予定、名古屋近郊に最終組み立て、整備工場

1



2



3

**経済関係**  
 ・1992年、ポーランド・ロシア善隣友好条約締結  
 ・1996年、連邦法「カーニンググロード州における経済特区について」(改正法：2006年)制定  
 ・ポーランド、ドイツ、リトアニアなどからの直接投資増加。  
 ・「貿易」分野が最大の分野で、ポーランドはEU加盟国の中で、ドイツ、フランス、イタリアに次ぐ規模の貿易相手国として、EU加盟国の中で最大の貿易相手国となっている。  
 ・主要な貿易相手 1 德國村 2013年 ワッカー研究所  
 2 農産物、農機具  
 3 観光 含：医療ツーリズム  
 ・貿易額 2015年 8億ドル → 2018年 4億ドル

4

**真の壁**  
 カーニンググロードと接するヴァルミア・マズーリ県は、県民一人当たりの域内総生産(GDP)はワルシャワを擁するマゾフシェ県の半分以下  
 失業率はマゾフシェ県が4.9%であるのに対し、ヴァルミア・マズーリ県は全体で10.4%、グィスワ湖湖(Zalew Wislany)に面する歴史・観光都市エルブロンク(Elblag)では16.4%に達している(2019年2月現在)。  
 ワルシャワからカーニンググロード 直線距離約300km  
 車でも約7時間(乗り換え待ち時間、国境検査含まない)  
 東京駅-名古屋間が約300km、新幹線(のぞみ)で1時間40分

5



6

**国境小規模通行(Maly Ruch)**  
 「ポーランド国境小規模通行協定」(2012年7月発効)＊これは、カーニンググロードとポーランドの国境周辺市町村との30日間の通行許可証を、半年間に連続90日を限度として発行。280万人がその対象となった。地域的にはカーニンググロード全体と、国境から約60km程度のポーランド市町村。2013年 延べ数十万人がこの制度を利用。  
 2014-2020年ポーランドトランスヨーロッパ協力プログラム(2014年)  
 ＊及び、ロシアが共同で出資し、文化復興、歴史遺産の保存、産業保護、観光振興への通信、地域のアクセシビリティの向上、輸送および通信ネットワーク整備、国境管理と国境警備の支援、などを促進する内容。

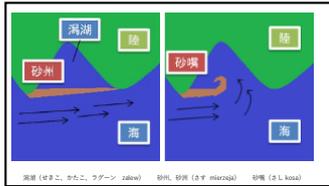
7

**ウクライナ紛争の範囲化**  
 1 EU・ロシア関係が悪化  
 ↓  
 2016年7月、ワルシャワで開催されたNATO首脳会議をきっかけにポーランド国境小規模通行を一時停止し、その後事実上小規模通行が廃止。結局、4年間でこの制度は幕を閉じたことになる。  
 ＊小規模通行が廃止された時は、これを促進する市民プラットフォーム(PKO)が政権をとっていたが、閉鎖した時は、ロシアとの小規模通行に懐疑的な法と正義 (PS) が政権の座にいた。

8



9



1

**ヴィスワ潟湖 (Zalew Wiślany)**  
 ロシアではカーニンググロード潟湖 (Калининградский залив)  
 潟湖 90.7km (うち33.1kmはポーランド)  
 平均水深は2.7m  
 バルト海との境にヴィスワ砂州 (Mierzeja Wiślana)、幅は1-2km

2



3



4

**歴史**  
 1479年の暴風雨でヴィスワ砂州の北側が水没し、1510年の暴風雨で完全に途切れ、バルト海とつながる。  
 この部分はロシア(カーニンググロード州)側でバルト海峡 (Балтийский пролив) と呼ばれ、全長2km、幅450-750m、水深12mの水路になっている。ポーランドではピワグワ海峡 (Ciesnina Piławska) と呼ばれている。  
 現在、とりわけカーニンググロード側からポーランド側にかけてのヴィスワ潟湖の水深が浅く、大型船舶が航行できない。しかし、ロシアがポーランドのために潮差を揃って保定を図ることは当然期待できない。また、2009年にボグダノフ橋に関する協定が結ばれたものの、ピワグワ海峡を通過してポーランド側に航行することはロシア側からかなり制限されている。

5

**ヴィスワ砂州横断運河建設計画**  
 33,000DWT積貨物船(最大積貨重量33,000t)、許容喫水12m、最大全長200mの船舶航行  
 完成すると大型船舶の航行が可能になり、エルブロンクの港湾・コンテナターミナル整備による物流活性化、グダニスク、グディニェ、ツポットの運河の復元、エネルギーの最先端産業振興、NATOの軍事面での東方防衛強化が図れると期待。  
 この計画には、バルト海からヴィスワ潟湖への唯一の海峡を有しその航行の基幹軸を持つロシア側からの強い反応。ヴィスワ潟湖の生態系を破壊し、自然環境が悪化するという内外の反応。

6



7



8

**まとめにかえて**

- ポーランドとカーニンググロードは、体制転換後に期待されたような経済交流の活性化が図れていない。
- ヴィスワ砂州横断運河建設に見られるように、ポーランドが相互交流に基づかない投資計画を推進しているのが現状。
- 政治的には、ウクライナ問題で悪化した対露・ロシア関係が、ポーランドとカーニンググロードの交流に大きな影響。
- ロシアとの経済交流に前向きな市民プラットフォーム(PO)と、積極的な法廷正義(FRS)のどちらが基軸となっているかも、ポーランドとカーニンググロードの関係に大きな影響を与えている。

9